

「関ヶ原の戦い」 - 最新の研究から

横浜歴史研究会
長尾 正和

はじめに

- ・ 1600・慶長5年9月15日の「関ヶ原の戦い」は、徳川家康が豊臣家を倒した「天下分け目の戦い」、との認識がかなり一般的であったが、近年では家康研究も大変進み、理解はかなり異なるものとなってきているのではないかと。
- ・ 結論から言えば、最近ではこの戦いは豊臣政権内部の主導権争い、すなわち、石田三成率いる「三成軍」と、親家康の武将たちによる「反三成軍」あるいは「家康軍」による戦いとして起きたものであり、それに西の雄である毛利一族が参加、さらに家康の天下を狙う立場が絡み合った戦いであったと考えられるようになっている。

1. 秀吉時代の終焉

1) 天下統一

- ・ 豊臣秀吉は1581 天正9年 6月2日**本能寺の変**ののち、**明智光秀**、**柴田勝家**を倒し、**毛利輝元**と講和、**小牧・長久手の戦い**後家康を臣従させる。
- ・ 天正13年7月**関白**就任、四国および九州を平定。天正18年7月**小田原征伐**、翌8月**奥州仕置**を経て全国統一を果たす。信長の没から9年で**天下統一**を成し遂げる。

2) 朝鮮出兵と秀吉の死

- ① 1592・天正20年3月朝鮮出兵－**文禄の役**に乗り出す。
破竹の勢いで5月には平壤まで進むも、途中明軍が参加し戦闘が激化、形勢も不利となる。その後講和交渉が始まり、紆余曲折ののち1596・文禄5年5月講和のため明冊封使が再来日するも決裂。

1597・慶長2年1月慶長の役が始まり再出兵。これがのちの「関ヶ原の戦い」に大きく影響する。

- ② 慶長3年3月15日 醍醐で盛大な花見の直後から体調を崩す。5月末病状悪化。8月18日**秀吉没**。
- ② 11月家康等により朝鮮より撤退。

3) 5大老・5奉行体制と家康

- ① 秀吉は病床で、没後の政権は5大老・5奉行により運営されることとし、かれらに秀頼（6歳）が成人するまでしっかり支えるよう命ずる。

➢ 5大老：（年齢は慶長3年時）

徳川家康 56歳 正二位内大臣 250万石

前田利家 59歳 従二位権大納言 83.5万石

毛利輝元 46歳 従五位下権中納言 112万石

上杉景勝 43歳 従三位権中納言 120万石

宇喜多秀家 17歳 従三位権中納言57.4万石

➢ 5奉行：

浅野長政 52歳 筆頭22.5万石

増田長盛 44歳 20万石

石田三成 39歳 19.4万石

長束正家 37歳 5万石

前田玄以 60歳 5万石

- ② 8月5日政権運営について次のような遺言を残す。

- ・ 第1条 大名家同士の婚姻は5大老の許可が必要。（私婚の禁止）
 - ・ 第2条 家康は3年間は伏見に詰めること。
 - ・ 第3条 秀頼を大阪城に移す。伏見城には5奉行の一人が輪番で詰めること。
 - ・ 第4条 大坂城の留守居は残る2奉行が行うこと。
 - ・ 第5条 伏見城下の諸大名屋敷は大坂に移すこと。
- ③ 「家康は5大老筆頭であり・・・家康と前田利家はそれまでと変わらず5人の中でも別格の立場に位置した。家康は・・・伏見での諸事御肝煎を委ねられた。」－黒

田・家康

- ・「家康はこののちも「豊臣公儀の大老として合議や協調を尊重する慎重さを忘れなかった。」- 山内・將軍。

2. 豊臣政権における権力争い

1) 家康と反家康派の対立 - 家康詰問状

①秀吉没後、家康は多数派工作に乗り出す。11月から12月にかけて、長曾我部元親、島津義久、細川幽斉等を訪問。

②家康は有力3大名との間で婚姻の密約をする。

伊達政宗の五郎八姫と家康6男忠輝、
福島正則の息子正之と養女家康異父弟松平康元娘満天姫
蜂須賀家政長男の至鎮（よししげ）と養女小笠原秀政娘氏姫

③これに対し反家康の動きが顕在化。

- ・慶長4年1月19日 4大老、5奉行による詰問状使者が家康のもとに派遣され、秀吉遺命に背く、と詰問。
- ・このとき、伏見家康屋敷には**加藤清正**、**福島正則**、**黒田如水**・**長政**、**細川忠興**、**大谷吉継**、**榊原康政**、**本多正信**等々の軍勢が集まり緊張状態となる。
- ・この軍事力に対し問題化した5奉行がむしろ詫びを入れる形で決着が付けられ、私婚の一件は不問に付せられた。- 笠谷・関ヶ原

2) 反三成派七将の+三成襲撃事件 - 三成失脚

①3月11日家康は利家を見舞いに行く。翌閏3月3日利家没。享年60。

- ・翌4日にはいわゆる**三成襲撃事件**が発生する。**加藤清正**、**福島正則**、**黒田長政**、**浅野幸長**、**細川忠興**、**蜂須賀家政**、**藤堂高虎**。の七将（異論もあった）が石田三成の追討を図り軍勢を動員し大坂の三成屋敷を包囲する。三成は家康の屋敷に逃げ込んで家康に助けを求めた、という。
- ・近年では、三成は大坂から伏見城内の自邸である治部小丸と呼ばれる屋敷に逃げ帰り、追いかけてきた清正らの軍勢とにらみ合いとなった、とする。
- ・また、これは襲撃したのではなく訴訟に及んだ事件、とする説もある。- 渡邊・歴史道・70将

②七将のうち、**清正**、**正則**は秀吉子飼いの家臣、ほかの5人も信長時代から秀吉につかえた、いずれも**豊臣恩顧大名**と呼ばれる武将たちである。いずれも「親家康派」。

- ・七将は三成追討を図ったが家康はこれに同意せず。結局**家康**・**輝元**・**景勝**の**3大老**の協調にて処理し、三成は奉行を解任され、10日家康次男秀康に護衛されて自領の佐和山城に蟄居させられる。

<豊臣恩顧大名>

東西	武将名	歿年	旧領	万石	関係
東軍	加藤清正	37	肥後熊本	25.0	秀吉小姓
東軍	福島正則	38	尾張清洲	20.0	秀吉小姓
東軍	加藤嘉明	36	伊予松前	10.0	秀吉直臣、のち大名へ
東軍	田中吉政	51	三河岡崎	10.0	秀次付き家老
東軍	藤堂高虎	43	伊予板島	8.0	秀長家臣、秀吉大名へ
東軍	山内一豊	54	遠江掛川	6.8	秀吉仕官
西軍	小早川秀秋	27	筑前名島	35.7	秀吉親族
西軍	青木一矩	不詳	越前北ノ庄	21.0	秀吉親族
西軍	小西行長	41	肥後宇土	20.0	秀吉に仕官
西軍	石田三成	39	近江佐和山	19.4	秀吉小姓
西軍	立花宗茂	32	筑後柳河	13.2	秀吉により大名へ
西軍	大谷吉継	34	越前敦賀	5.0	秀吉小姓
西軍	長束正家	37	近江水口	5.0	秀吉奉行衆

③この争いの原因は朝鮮の役におけるこれら武将と三成の対立であった。

- ・慶長2年11月**加藤清正**等が築城した釜山近く蔚山城を明軍が大勢の軍勢をもって攻撃を重ねる。豊臣軍は籠城を基本とし撃退するも、寒さと兵糧不足に悩まされる。
- ・**宇喜多秀家**、**毛利秀元**、**蜂須賀家政**は蔚山を含む一部の城の放棄、すなわち戦線縮小案を1月16日付で秀吉に提出するが秀吉の不興を買う。
- ・また、蔚山城が攻撃されたとき**黒田長政**と**蜂須賀家政**は合戦をしなかったと三成に近い軍目付が秀吉に報告。これらにより、長政、家政は謹慎蟄居と領地の部分没収処分を受けている。- 笠谷・関ヶ原

④これらについても秀吉の死後、**家康**は無きものとして、**秀家**、**家政**を旧領に戻している。朝鮮の役では家康は後方部隊であり、この間多くの武将の慰労に努めたという。

3) 家康暗殺未遂計画 - 前田利長家康臣従

- ①半年後9月家康は、高台院の出たあと大阪城西の丸に入り政務を主導。家康の天下人化でありその代行でもあった- **黒田・家康**
- ②半年後、慶長4年9月**家康暗殺の計画**があると、**増**

田長盛から大阪城の家康に密告があった。

- ・ 首謀者は**前田利長**、ほかに**浅野長政**、**大野長治**、**土方雄久**であると。
- ・ 家康は伏見から軍勢を呼び寄せ警護を固めるとともに、10月3日**北陸征討**を発令し自ら出陣すると述べた。前田利長はこの動きに驚き、家康に対し弁明に努めた。慶長5年5月母芳春院（まつ）を江戸に人質として送る。家康は他の3人も処分。
- ・ これにより**利長**は家康に従属することとなる。
- ・ 近年ではこの事件は**利長**を排除するための陰謀、あるいは虚説であったとも言われている。- **黒田・家康他**

3. 会津征伐と三成挙兵

1) 上杉景勝と直江状

- ① 関ヶ原の戦いの大きな契機は家康による会津上杉景勝討伐である。
 - ・ **上杉景勝**は信長没後秀吉の下で、その功により、1595・文禄4年6月大老の一人に任ぜられる。
 - ・ 秀吉没の5カ月前慶長3年3月会津120万石へ加増移封。
- ② 秀吉が亡くなったとの報を受け景勝は9月に伏見へ赴く。その1年後慶長4年9月会津に帰国している。
 - ・ その後の領国での景勝の不穏な動きに関しては2月隣国越後の**堀直政**から、また3月には出羽国主**最上義光**が大阪の家康のもとに赴き、それぞれ報告する。さらに3月11日景勝の家臣藤田信吉が出奔の上家康に内部告発。
 - ・ これらの領内での体制づくりは「秀吉没後の・・・争乱の遠からぬところを悟り、・・・領内の諸城の修築増強をすすめ、兵糧を蓄え、武器鉄砲を大量に調達し、さらに諸国流浪の勇猛の士を召し抱えるなどをして、その軍事力を大いに強化していた」- **笠谷・関ヶ原**。
- ③ 4月1日家康は景勝に上洛し説明するよう求め、その書状を会津に届ける。これに対する4月14日付の返書がいわゆる「直江状」である。
 - ・ なお、この写本は広く流通しているが、原本は現在どこにも見つかっていない。
 - ・ 「直江状」は16か条（15か条、14か条のものもある）からなり、家康に対して非常に挑戦的な内容で、5月3日これが家康のもとに届くが、家康はこれ

に激怒。その日に会津征伐が決められ、**福島正則**、**細川忠興**、**加藤嘉明**が先鋒に命ぜられる。

- ④ 「直江状」の内容は、おおむね次である。
 - ・ 「上洛しないのはまだ帰国して間もなくであり、この間領国の政務をようやく執り行っている。雪国なので10月から3月は何もできない。
 - ・ 景勝には逆心は全くない。むしろ讒言（ざんげん）したものを調べるべき。
 - ・ 武器については、田舎武士は鉄砲や弓矢の支度をするのがお国柄としていただけによい。道や船橋の整備は国を持つものとしては当然。」- **Wikipedia「直江状」要約**
- ⑤ 「直江状」の存在については、これまで存在そのものが否定されたり、偽作ではないかとするなどの議論があった。近年では実在はしたが、会津征討そのものを正当化するためにのちに種々加筆修正等がなされたのではないかとの説が多い。

2) 会津征伐へ出陣

- ① 家康は6月6日大阪城で会津征討の評定を行う。
 - ・ **佐竹義宣**・**伊達政宗**・**最上義光**、**前田利家**、**堀秀治**等の会津周辺の武将たちに出征の部署に付かせた。- **藤野・幕藩体制史**
 - ・ 16日家康は大阪城を出陣。**井伊直政**等直臣3000人、ならびに**福島正則**・**池田輝政**等多くの豊臣系大名による5万5千余りの兵が随従する。
 - ・ 途中18日大津で**京極高次**、21日三河吉田城では**池田輝政**、23日掛川で**山内一豊**、等途中多くの武将の饗応を受けている。
 - ・ 24日三島で出迎える**本多正信**、**大久保忠隣**が合流。7月1日**江戸城**に入る。
 - ・ 7月7日家康は江戸城で参陣の武将たちを饗応。
 - ・ 家康は21日出陣と決め、江戸城を立つ。22日**三成**



徳川家康像 Wikipedia より

拳兵の報が京極高次より届く。24日下野小山に到着。

②この時代、戦においては一般的に戦では近隣の武將を参戦させる。しかし、この戦いにおいては「**福島正則**・尾張・清洲、**池田輝政**・三河・吉田、**山内一豊**・遠江・掛川等の東海道沿いの豊臣系大名に加えて、**黒田長政**・備前・中津、**加藤嘉明**・伊予・松前、**藤堂高虎**・伊予・板島等の従軍義務のない九州、四国の大名たちが参加している。

③これは「家康が大阪を離れるならば必ず生ずるであろう大乱に際して家康側に与することをあらかじめ表明した行為であった」。-**笠谷・関ヶ原**

3) 三成拳兵

①**石田三成**は7月初めころ反家康として拳兵する考えを**大谷吉継**に打ち明け、12日**三成**、**吉継**、**安国寺恵瓊**、**増田長盛**らが佐和山城で計画、総大将として**毛利輝元**に出馬要請、会津征討軍の妻子を人質とする、などを決めている。

・ **輝元**は16日大阪城に入っている。

②17日三成の下で**増田長盛**、**長束正家**、**前田玄以**の3奉行連署により13条からなる家康糾弾の書「**内府ちかひの条々**」が発給される。

・ 「この文書の宛先は西国の1万石以上の62大名となっている。筆頭が**毛利輝元**、続いて**宇喜多秀家**、**小早川秀秋**、**島津忠恒**、**長曾我部盛親**等で、かれらの大きな軍事力が期待されていたことがわかる。

・ ここには尾張、信濃、加賀等より東国の大名は入っていない。西国大名を反家康の軍事力として…編成



石田三成像 (彦根 龍潭寺蔵)

しようとした、とみなすことができる」。

・ 「西国大名であっても**黒田長政**

(豊前中津)、**細川忠興**(丹後宮津)は入っていない。…かれらは当初から家康サイドである…とみなされていた」 -**白峰・考察**

③この文書では家康につき次のポイントを糾弾している。

- ・ 五奉行のうち石田三成と浅野幸長の両人を罷免したこと (七将襲撃と家康暗殺事件)
- ・ 前田利長から人質にとり、追い込めたこと (家康暗殺事件)
- ・ 上杉景勝討伐を企て勝手に出陣したこと (会津討伐)
- ・ 北政所様の居所、西ノ丸を占拠したこと (西の丸入居)
- ・ 家康派大名の妻子を、国もとへ返したこと
- ・ 数多くの私婚をしたこと

4) 小山評定

①家康は25日小山に着き、秀忠ほかの諸將を集め評定を催す。

・ 家康は諸將に対し、それぞれの妻子が大阪で人質となっていることもあり、三成に与することを妨げない。

・ これに対し、まず**福島正則**が家康に与して三成を討伐すると申し出る。**黒田長政**が真っ先に賛意を示すとかれらは次々に家康に従うことを表明する。

・ 掛川城主の**山内一豊**が東海道筋の居城を活用するよう進言、…この発言によって、東海道筋に居城を持つ諸將は、一豊にならう。これで家康の軍事的展開が容易になる-**笠谷・関ヶ原**

・ 家康は大坂を鎮圧するため**正則**と**池田輝政**を清州城に向かわせる。

②なお、小山評定についての一次史料が見当たらず、その存在が軍記物の記述によることから、家康は小山には着いたが「小山評定」はなかったとする意見がある。-**白峰・関ヶ原**

5) 江戸滞在1カ月と調略

①8月2日家康は小山を立ち、5日江戸城に戻る。その後ひと月弱の間江戸に留まる。この間様子見をしていたとされるが、かれはこの間戦の前の調略作戦に専念し、多くの武將たちに書状を送っている。

・ 「家康が慶長5年に発した書状は7月34通、8月93通、9月34通等全部で**169通**の多さ。個別の武將では**福島正則14通**、**黒田長政9通**、**浅野幸長9通**等々。…家康の多数派工作にとって大きな意味を持った。」-**歴史人・小和田**

4. 関ヶ原前哨戦

1) 7月18日～8月1日 伏見城落城 鳥居元忠 討死

- ①三成が拳兵を決めてすぐの19日、**宇喜多秀家**を総大将とし、**小早川秀秋**らの総兵力4万ほどの三成方軍勢が、早速家康が留守となった居城伏見城を攻撃。
- ②留守を預かっていた**鳥居元忠**の兵は、2300程。昼夜を問わず鉄砲が撃ち込まれ、8月1日元忠は討取られ、多くの武士たちも討ち死に追い込まれ、落城。

2) 7月22日～9月12日 田辺城の戦い 細川幽斎籠城

- ①細川忠興が出陣したあとの**丹後田辺城**に対、7月19日、丹波、但馬、摂津等の親三成軍1万5千の兵力が城を包囲、攻撃。城の留守居は父幽斎と実弟幸隆で兵はわずか500人ほど、月末には落城寸前となる。
- ②幽斎は公家の三条家から歌道の奥義である古今伝授を相伝されており、後陽成天皇も幽斎の死と古今伝授の断絶を恐れた。
- ・三条家が東西両軍に勅使を送り講和を命じ、12日講和が成立。幽斎は9月13日城を明け渡す。
- ・三成軍は一応勝利したが、その1万5千の兵力は関ヶ原の戦いには参戦できなかった。

3) 7月26日～8月9日 浅井騨の戦い 前田利長 vs 丹羽長重

- ①北陸では**前田利長**が**丹羽長重**と戦う。**利長**は2万5千の兵で**長重**の加賀・小松城を包囲するも、攻めきれなかった。しかし、その後加賀・大聖寺城(石川・加賀市)を攻め落とす。
- ②金沢に戻る途中8月7日浅井騨(小松市)において**長重**により攻撃を受け被害を被るも、10日金沢に帰還している。
- ③家康からの求めにより、利長は11日西上を開始。18日長重と和議を結んでいる。

4) 8月22日～23日 岐阜城の戦い 織田秀信 vs 池田輝政・福島正則等

- ①**織田秀信**(美濃岐阜・13万石)は石田三成から美濃・尾張2か国を与えるとの話を受け三成軍につく。

- ・小山から戻った**井伊直政**、**浅野幸長**、**山内一豊**、**藤堂高虎**、**黒田長政**等の武将たちが岐阜城を攻撃。
- ・8月22日朝、**池田隊**は木曽川北部を、また**福島隊**は南部からそれぞれ渡河し23日岐阜城を攻撃。
- ②秀信は輝政の説得で降伏し、一日で**岐阜城は陥落**。秀信は下山、のち高野山に入る。

5) 8月23日～25日 伊勢・安濃津城等攻撃

- ①三成軍は**毛利秀元**、**吉川広家**、**長束正家**ら伊勢の平定に向かう。
- ②会津征伐に向かっていた安濃津城**富田信高等**は、途中遠征から帰城。三成軍は24日頃から3万とも言われる部隊で攻撃。富田の兵力はわずか1800程。
- ・兵力差はいかんとせせず25日には**信高**は降伏し、出家する。

6) 9月5日～10日 上田合戦 真田昌幸 vs 徳川秀忠

- ①**秀忠**は**神原康政**、**本多正信**、**大久保忠隣**ら家康家臣による兵力36000という徳川家本隊というべき大部隊を率いて中山道經由関が原に向かう。
- ②途中、9月2日小諸に到着。真田昌幸(2500)に降伏を求めるも応ぜず、5日には合戦開始。
- ③秀忠軍は、巧みな戦法をとる真田勢に大敗し、関ヶ原に遅参したとされるが、近年では両軍の小競り合いはあったものの、秀忠軍は敗北したわけではない。
- ④家康から9月9日までに美濃赤坂に着陣すべしとの書状が届いたのは、その使者の到着が遅れたため。秀忠はこの日全軍を小諸に撤回させる。10日には美濃に向かうが、その後の悪天候もあり、本戦に間に合わなかった。

7) 9月7日～14日 大津城の戦い 京極高次 vs 毛利元康、立花宗茂等

- ①9月1日**京極高次**・近江大津は三成軍として北陸攻めに参加していたが、途中家康軍参戦のため大津城に戻る。これを知った三成軍は7日**毛利元康**、**立花宗茂**らが1万5千(4万等の説あり)の軍勢により大津城の攻撃を始める。
- ②**高次**は徹底抗戦の姿勢であったが、**宗茂**等の説得により降伏、13日和睦が成立、**高次**は14日近くの園城寺(現大津・三井寺)まで下城、さらに高野山に

送られた。

- ③これにより**元康**と**宗茂**の軍勢は関ヶ原に参陣出来ず。のちに**高次**のこの引き留めが評価される。

8) 9月8日～9月13日 石垣原の戦い 黒田如水 vs 大友義統等

- ①北部九州では「西の関ヶ原」と呼ばれる**黒田如水**が**大友義統**（よしむね）を征討した豊後・石垣原の戦いが起きた。義統は大友宗麟の嫡男で、豊後領主で文禄の役での失態により改易となっていたが、秀吉の死により赦免されていた。
- ②三成拳兵ののち、8月になって秀頼より、鉄砲300丁、武器、馬、銀等が与えられ、毛利輝元の支援も受け豊後に向かう。旧領の回復を期待したのではという。如水は家康軍への参加を求めが応じなかった。
- ③義統は9月8日豊後に着き、細川忠興の分領杵築城などを攻撃する。
- ・黒田如水は13日義統を破る。15日義統は降伏、助命されるものの家の再興はならなかった。

9) 9月8日～30日 慶長出羽合戦 上杉景勝 vs 最上義光・伊達政宗

- ①奥州では「北の関ヶ原」、あるいは「慶長出羽合戦」と呼ばれる両陣営の戦いが起きる。
- ・奥州支配を狙う**上杉景勝**・出羽会津は家康の西への出陣を知り、9月8日出羽山形北方の庄内および南の米沢から出羽山形・**最上義光**領への侵攻を開始。
 - ・景勝家臣**直江兼統**の軍勢は2万5千人、防戦の**最上義光**は総勢7千人、かつ本拠地山形城には4千人のみで、長谷堂城などいくつかの支城に兵力を分散していた。しかし、最上軍は各地で善戦。
- ②9月15日から18日にかけて兼統軍は最後に最上領山形城南西の砦、長谷堂城を包囲。**兼統軍**は力尽きて倒すべく攻め続ける。**最上軍**は一斉射撃などでここを何とか持ちこたえる。
- ・24日には最上軍に**伊達政宗**からの支援部隊が到着、25日義光も山形城から出陣、戦局は膠着状態となる。
- ③29日兼統軍が総攻撃をかけるも、ここでも最上軍は善戦。この日**関ヶ原での三成軍敗戦**の報が兼統に

届き、10月1日に上杉軍は撤退を開始。最上軍も前日30日には家康軍勝利を知る。兼統軍は20日に会津に戻っている。

5. 関ヶ原の戦いー本戦

1) 家康関ヶ原へ

- ①家康は、8月23日の福島正則らによる岐阜城攻撃・陥落の報を受け、9月1日3万の軍勢とともに江戸城から出陣。
- ・家康は諸将に対し、「豊臣家に敵対するのではない。豊臣家のためにならない三成を除く」とした。- **歴史人・小和田**
 - ・11日清州城に入り逗留、14日正午ころ赤坂（岐阜・大垣市赤坂町）に到着。
 - ・家康はここまで隠密のうちに進軍しており、赤坂到着後、石田方本拠地大垣城から見える山頂に金扇の馬印、葵紋の幟7旗、源氏の正当性を示す白旗20旗等を一齐に掲げた。
 - ・これは関東に釘付けのはずの家康の突然の到着を知り、大垣城の三成軍は動揺したという。
- ②赤坂で開いた作戦の論議では、「三成軍本拠地大垣城の攻撃」との**井伊直政**、**池田輝政**等の意見と、「大坂城を攻撃すべし」との**本多忠勝**、**福島正則**らの意見があったが、「目の前の大垣城をおいて一気に西に向かい、三成の佐和山を抜き、そのまま大阪に向かい**毛利輝元**と決戦に及ぶべし」との意見が大勢をなした。- **笠谷・関ヶ原**

2) 三成、家康両軍出陣

- ①三成軍の本拠地は大垣城。最大兵力の**宇喜多秀家**隊が大垣城に戻り、北陸から戻った**大谷吉継**も2日大垣城に入る。
- ・三成の戦略は美濃を防御ラインとし、大垣城に籠城との考えもあったが、関ヶ原で家康軍を迎え撃つとのプランもあった。
- ②三成は家康軍の大坂城攻撃との情報をつかみ、14日夜7時ころ**三成**、**島津義久**、**小西行長**、**宇喜多秀家**の隊は密かに大垣城を出て、おりしも雨が甚だしい中を行軍、西方の関ヶ原に向かう。15日午前1時ころ三成隊は関ヶ原に到着。3時ころには宇喜多隊も天満山に布陣。

- ③家康は三成が大垣城を出たとの情報を得て、全軍に出動命令を出し、午前3時ころから行軍を開始、15日午前6時ころ進軍を停止し、関が原一帯の平地に布陣。
- ・家康は桃配山に本陣を置く。家康の部隊は旗本を中心とする3万の兵力。主力部隊は豊臣政権下で**三成排除を目指す武将たち**である。
- ・先鋒は**福島正則、藤堂高虎、黒田長政、細川忠興、加藤嘉明**等々。
- ・東方南宮山での毛利隊への抑えには**山内一豊、浅野幸長、池田輝政**等の諸隊が布陣。
- ④三成軍全体は15日午前5時ころ関が原に布陣完了。
- ・7日には**吉川広家、毛利秀元**等(16000)の毛利隊が南宮山入っていた。
- ・他にも**笹尾山・石田三成、天満山・宇喜多秀家、大谷吉嗣、松尾山・小早川秀秋**(約16000)、**栗原山・長曾我部**(6600)・**長束長政**(1500)、**安国寺恵瓊** 1800)などの諸隊が布陣した。

3) 本戦での兵力数

- ①本戦における両軍兵力数については種々言われるが、「家康軍7万4千、三成軍8万4千とほぼ互角であった。」- **小和田・関ヶ原**
- ・両軍兵力数については確たる一次史料が見当たらないこともあり、これまでの研究の多くは基本的に旧参謀本部による「1893・明治26年日本戦史・関ヶ原の役」によっている。- **水野・歴史道・合戦**
- ・ここでは根拠を当時各戦において各大名が出すべき兵力であった「3人役」、すなわち動員数は石高100石につき兵力3人との規定に基づいている。戦闘場所が自領からの遠近により「2人役」「1人役」などもあるが、このときの各大名への指示内容は明確でない。
- ・これらに加え、各武将の家に記録が残されていることもあり、兵力数推定値は研究者によりばらつきがある。

4) 本戦 (資料1参照)

- ①15日午前8時(辰の刻、午前10時巳の刻説あり)前夜からの雨により立ち込めていた深い霧も薄らぎ、見通しが効くようになる。
- ・ここで井伊直政が家康4男松平忠吉を引き連れ騎馬30人を率いて大音声を発しながら突撃。一番乗りを狙う抜け駆けであった。

- ・続いて**福島正則**隊(兵力6000)が**宇喜多秀家**隊(17000)への攻撃を命じ、鉄砲足軽800人が一斉射撃。これにより各場所で激しい戦闘が始まる。
- ・戦国時代のような「『弓矢の飛ばし合い』や『長槍での叩き合い』はなく、すぐに白兵戦になっている。」- **白峰・関ヶ原**
- ・9時ころ秀家隊の反撃を受け福島隊は一時退却を余儀なくされるが、正則が陣頭指揮に乗り出し、隊列を整えた。
- ②家康軍にとり重要なのは総指揮官**石田三成**の首を取ることであるが、**三成**隊への攻撃を担ったのは**黒田長政・加藤嘉明・細川忠興・田中吉政**らによる約19000の大部隊であった。
- ・側面及び正面から**長政**等の部隊が攻め込み、石田隊は猛攻撃にさらされ、崩れるかに見えたが、前夜に大阪城より持ち込んだ大砲を打ち込み一旦は押し戻した。この後も簡単には決着つかず、一時は石田隊は結束を乱すことなく善戦した。- **笠原・関ヶ原**
- ・**島津義久・義弘**隊との戦いは**井伊直政・松平忠吉**隊(6600人)が参戦。
- ・**大谷吉継**隊に対峙したのは**藤堂高虎・京極高知**隊(約5500)であった。
- ・序盤から中盤にかけては三成軍やや優勢の一進一退が続いた。
- ③10時ころ三成は当初打ち合わせ通り、狼煙を上げて小早川隊、毛利隊の参戦を促すが、共に動かなかった。
- ・**秀秋**は様子見ののち三成軍を裏切ったとされているが、近年では家康軍につくことは黒田長政の調略によって既に決まっていたとする。
- ・**秀秋**隊にはその監視のため家康及び黒田長政の家臣が送られていた。- **笠谷・関ヶ原**
- ④一方、家康側においても内応を約束していたにもかかわらず**秀秋**が動かないため、11時半ころ家康は参戦を促す「**問鉄砲**」を放ったとされる。
- ・しかし、「問鉄砲」の存在について、近年ではのちの創作として多くが否定している。
- ⑤ついに**秀秋**は**大谷吉継**隊への攻撃を開始する。秀秋以外にもすでに家康に内応を約していた**脇坂安治**、ならびに**朽木元綱、赤座直保、小川祐忠**らも寝返り、大谷隊を襲う。

- ・ なお、**秀秋**、ならびに**脇坂**等の裏切り、参戦は通説では昼頃とされていたが、最近では開戦と同時とする説も有力。-**白峰・関ヶ原**および**歴史道 70 将・渡邊**
- ・ 大谷隊は秀秋隊に一時反撃するが、脇坂隊の側面攻撃で戦闘能力を無くし、**吉継**は自害。
- ・ 秀家隊の左翼にいた小西隊もこのころ早々に敗走を開始したとされ、秀家隊は1時ころには総崩れとなる。もともと家中内紛により秀家隊はまとまりに欠けていたという。
- ⑥石田隊攻撃には、その後**藤堂・京極・織田**隊が加勢、正午を過ぎたころ石田隊は壊滅状態となり、三成は逃亡。
- ⑦この間**毛利秀元**、**吉川広家**、**安国寺恵瓊**の毛利隊一族の諸隊ならびに**長曾我部盛親**、**長束正家**は布陣していたが参戦しなかった。
- ⑧午後2時（もしくは3時）ころ**島津義弘**隊が家康軍中央を突破、戦線を離脱。
- ⑨戦いが終結したのは午後3時（もしくは4時）ころである。家康軍本体、および南宮山の毛利軍の抑えであった池田輝政隊等も戦闘に参加する機会もなく、余力を残しての完勝でもあった。

6. 本戦後

1) 三成軍討伐

- ①翌16日家康は佐和山城の攻撃を命ずる。
 - ・ 17日総勢2万ともされる**小早川秀秋**、**脇坂安治**らに加え裏口からは**田中吉政**らが攻撃。
 - ・ 守備していた三成兄の**石田三澄**とその一族(兵2800)に家康は使者を派遣するが三澄は自刃し翌朝開城する。
- ②本戦での敗戦により、三成軍本拠地となっていた大垣城、あるいは伊勢亀山城、桑名城、伊賀上野城等の三成軍諸城も数日間で相次いで陥落している。
- ③関ヶ原から逃亡した**小西行長**は19日には捉えられ家康本陣に送られる。
- ・ **三成**も**田中吉政**の兵に捕縛され、22日大津に護送。23日には**安国寺恵瓊**も捉えられ大津に護送される。家康が大津城から淀城に移る際はこの3名は大坂城に護送される。

2) 終戦後の家康の動き

- ①9月20日家康は京極高次の大津城に入りしばらく逗留、遅参した秀忠はここで合流。
 - ・ **家康**は**大野治長**を大坂城に遣わし、**秀頼**と**淀殿**が今回の戦に関係あるとは家康は全く思っていないと説得させた。淀殿は礼の手紙を持たせて大野を送り返している。
- ②一方で、関ヶ原本戦において功のある**吉川広家**が「輝元の三成軍総大将就任は本人の関知していないところである」と家康を説得し、家康はその説明に得心したとの回答が示された。
 - ・ 家康家臣**本多忠勝**と**井伊直政**が、家康に領地安堵の意向があることを保障する起請文を輝元に差し出し、それを受け9月25日に輝元は大坂城西の丸を退去した。
- ③家康は27日大阪城入城、輝元の出た西の丸に入る。嫡子秀忠を二ノ丸に入れる。その日には大阪城の淀殿および秀頼に直面している。
 - ・ この時点では家康は秀頼の下での「天下の家老」位置づけに過ぎなかった。- **歴史道・小和田**
 - ・ 戦いの論功行賞の調査を**井伊直政**、**本田忠勝**等6名の家臣が命ぜられて、10月15日以後随時発表される。
- ④この戦いでは「図らずも(家康)反対勢力が一斉に蜂起し、それに軍事勝利したことで家康の覇権は一気に確立した。」- **黒田・家康**
- ⑤こののち秀頼との主従関係については解消していないものの、家康は翌年初の年頭挨拶は病氣と称して行っていない。ただし、家康が征夷大将軍に任官する慶長8年2月12日までの間に秀頼には2回ほど出仕している。
 - ・ また、家康、秀忠、秀康は羽柴・豊臣姓を与えられていたが、合戦後9月20日以後はその使用を止める。豊臣からの離脱を明示したことになる。- **黒田・家康**
- ⑥家康はほぼ半年後、慶長6年3月23日大阪城を出て伏見城に移る。天下の政庁]を大阪ではなく伏見とし、諸大名の人質も伏見に移させている。
 - ・ これで大阪城は豊臣家の居城に特化。また、豊臣の直轄領はすべて収公され、秀頼には摂津・河内・和泉3か国65.7万石が与えられる。

- ・ただし、これは秀頼を1大名化したわけではない。領地を与えられた諸大名は徳川家への賦役に参加させられていたが、秀頼にはその義務は課されず諸大名とは別格の地位は保たれていた。

7. 戦後処理

1) 家康軍

①家康は戦後処理において三成軍88家を除封、大大名5家を減封することで、632万石余りの配分の権利を得る。

②家康軍の主要大名はそれぞれ大幅な加増を受けた。20万石以上となった外様大名。(資料2)

・北陸奥羽大名へ

前田利長 +35.8万石 加賀金沢 119.3万石
伊達政宗 +2.0万石 陸奥仙台 60.5万石
蒲生秀行 +42.0万石 陸奥会津 60.0万石
最上義光 +33.0万石 出羽山形 57.0万石

・中国地方大名へ

池田輝政 +37.0万石 播磨姫路 52.0万石
福島正則 +29.8万石 安芸広島 49.8万石
堀尾忠氏 +12.0万石 出雲松江 24.0万石

・四国大名へ

山内一豊 +15.4万石 土佐浦戸 22.2万石
藤堂高虎 +12.0万石 伊予今治 20.0万石
加藤嘉明 +10.0万石 伊予松山 20.0万石

・九州大名へ

黒田長政 +34.2万石 筑前名島 52.3万石
加藤清正 +26.5万石 肥後熊本 51.5万石
細川忠興 +21.9万石 豊前小倉 39.9万石
田中吉政 +22.0万石 筑後柳河 32.0万石

・その他

浅野幸長 +15.1万石 紀伊和歌山 37.6万石

③譜代大名への論功行賞は少なく、筆頭の井伊直政ですら18万石であった。家康は外様大名たちには禄を与え、譜代大名には政権運営の権限を与えた。また、ご家門は大きく加増された。

結城秀康 +56.9 越前北ノ庄 67.0万石
松平忠吉 +42.0万石 尾張清洲 52.0万石
井伊直政 +6万石 近江彦根 18.0万石

2) 三成軍

①処刑：10月1日**石田三成**、**小西行長**、**安国寺惠瓊**の3名は大阪、堺、京で引き回され、京六条河原で斬首。

- ・**大谷吉継**および**長束正家**は本戦で戦死。
- ・**宇喜多秀家**は改易の上遠島八丈島へ流罪。

②改易減封：毛利、上杉等大老を含む大大名が改易減封処分となる。

- ・**毛利輝元** 長門萩 29.8万石
- ・**毛利秀元** 長門府中 5.0万石
- ・**吉川広家** 周防岩国 3.0万石

③安堵：三成軍であったが領地を安堵された大名もいた。

- ・**鍋島直茂** 肥前佐賀 35.7：本戦開始前に嫡子勝茂は離脱、のち九州での戦いで家康軍に。
- ・**蜂須賀家政** 阿波徳島 17.3：病気を理由とし参戦せず、嫡子至鎮は家康軍。
- ・**生駒親正** 讃岐高松 17.2：在国。息子一正は家康軍。

④加増：**小早川秀秋** 備前岡山 51.0万石。

- ・1597・慶長2年慶長の役でかれは総大将として参陣するも、命により帰国すると越前12万石への減封が命ぜられる。

・理由は蔚山城での秀秋の軽率な行動とされるが、秀秋の朝鮮での行動を軽拳とし三成らが秀吉に報告。

・慶長4年1月秀秋は家康の計らいで筑前・筑後37.5万石に復活している。

- ・長政は浅野幸長と8月28日付で秀秋宛連署を出し、秀秋がお世話になった北政所への忠節を説き、家康に与するよう勧めている。- 歴史人・渡辺

・また、秀秋には**黒田長政**・**井伊直政**・**本多忠勝**から、上方において2か国を与えるという条件を示した誓書が届けられている。- 歴史人・大全・小和田

・三成からも誘いを受け秀頼が15歳になるまで秀秋を関白とするとの条件が提示されていた。

・秀秋は大きな加増を受けたが、その2年後秀秋21で没する。無嫡子であったため小早川家はお家断絶となった。

⑤**上杉景勝**、**佐竹義宣**、**島津義弘**は本戦敗戦後もしばらくの間家康に従属との態度を示していなかった。

- ・**上杉景勝** 出羽米沢 30.0万石：景勝は10月23日和睦を決め慶長6年7月上洛、秀頼に謁見

後、8月8日伏見城の家康を訪問し謝罪。8月16日出羽米沢30万石への減封が伝えられる。

- ・ **佐竹義宣** 出羽秋田 20.6万石：敗戦後義宣は居城の水戸城を動かさずであったが、父義重の説得でようやく上洛し家康に謝罪したのは慶長7年4月であり、翌月秋田への減封改易が通知された。
- ・ **島津義弘** 薩摩鹿児島 60.9万石：島津が降伏しないため10月家康は島津義久の討伐を九州全大名に命ずる。軍勢は**黒田長政、立花宗茂、鍋島直茂、加藤清正**。
- ・ 義久は対戦のため先頭に立って軍を率いて薩摩国境まで北上するが、11月22日になって家康に謝罪の使者を送る。この交渉がまとまるのはほぼ1年半後慶長7年3月。ここで薩摩、大隅等60万石の本領安堵が決定する。

8. 家康軍勝利の理由

1) 両軍の指揮官の力量の違い

- ①家康勝利の理由についてはいろいろ語られているが、私見を含めて次の3点と考える。
 - a. 家康と三成という両軍リーダーの政治力、軍事経験力等人物としての総合的な力量の差。
 - b. 家康による毛利輝元下の毛利軍の分断。
 - c. 両軍の参加武将たちの戦闘力の違い。
- ②家康は秀吉により大老の筆頭として認められており、人物、器の大きさ、政治力等々すでに多くの武将からも充分評価されていたことは間違いないであろう。
- ・ 家康は戦闘経験も充分であった。城攻めは得意ではなかったともされるが、多くの戦いで自ら前線に身を置き、勝ち、負けを含め多々経験している。
- ・ 関ヶ原でも、合戦の最中では総指揮官として自ら平地に降り各武将に指揮を行っている。
- ③一方三成はいわば有能な官僚、正義感の強い武将であったと考えられるが、戦いの経験豊かとは言えず、ましてや大軍勢を率いての戦いでの野戦指揮官の器ではなかった。

2) 毛利一族の分断

- ①三成軍は兵力の面で見れば毛利一族の軍勢を頼りにしたともいえる部隊でもあった。

- ・ 毛利輝元の祖父元就は息子を小早川家、吉川家に養子に出し、全員で毛利宗家を守ることを誓わせ、いわゆる「毛利両川体制」を築いていた。
- ・ これら一族を戦いの前にまったく分断させたのは家康である。実際には黒田如水・長政父子は早くから親家康であり、その役割を担った。
- ②三成軍敗戦の最大の理由は、**小早川秀秋**の寝返りである。かれは毛利両川体制の一角であり、大軍（15700人）を率いていた。
- ③さらに、**毛利秀元、吉川広家**等毛利一族（16000人）の大軍勢が関ヶ原南東の南宮山に布陣はしたものの参戦しなかったことも大きく作用した。これも事前の調略による。
- ・ また、**総大将**である毛利輝元自身が大阪城にとどまり、戦場に出てこなかったことも事前の調略によるとされている。
- ④祖父元就は中国地方を制覇したのち、「天下を眺望せず」として毛利家がこれを守るよう述べたが輝元は従わなかった。

3) 両軍参陣武将たちの戦闘能力の違い

- ①親家康派の豊臣系の恩顧大名とされる多くの大名が朝鮮の戦役で数多くの厳しい戦闘経験をしており、家康の下で結束して戦いに臨んでいる。
- ②三成軍の一部も同じ経験をしているが、全体としては家康軍諸将のほうが勝っていた。

9. 徳川家による支配体制確立

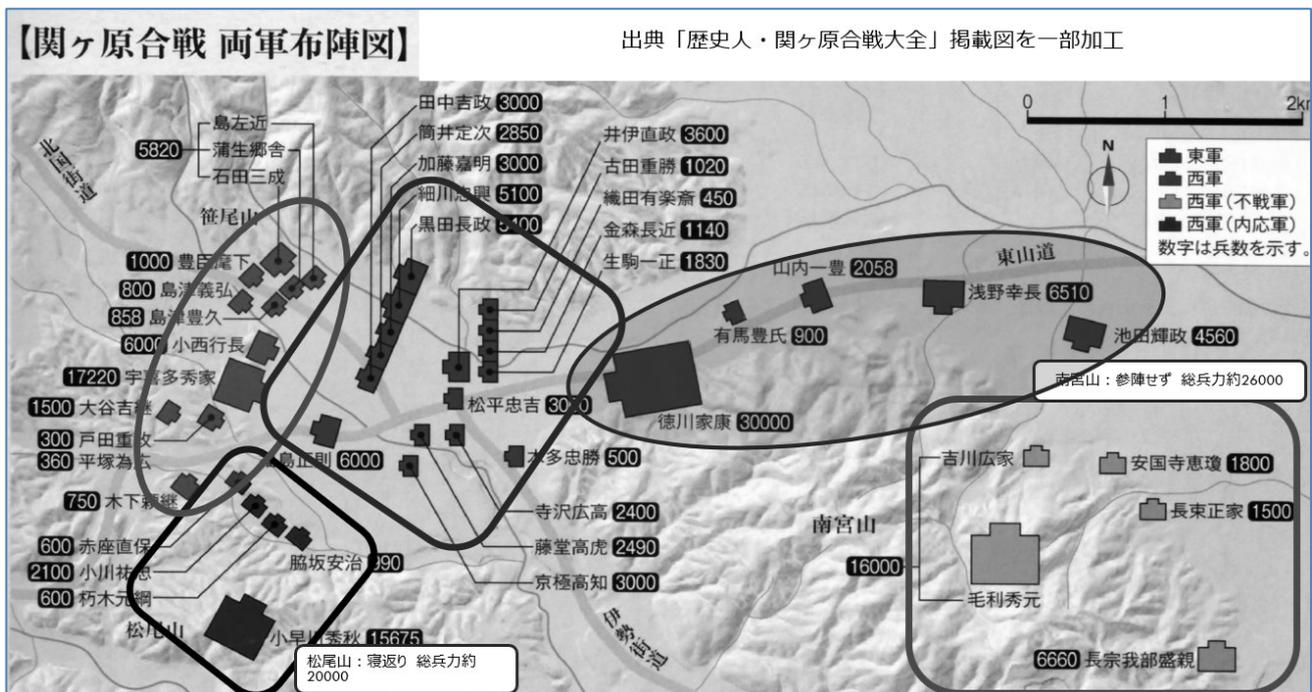
- ①家康は1603・慶長8年2月征夷大将軍に任命される。慶長10年將軍職を秀忠に譲り、自らは大御所として政務を始める。
- ②家康は慶長19年11月、および翌20年5月の大坂の陣により豊臣家を倒し、徳川家による幕藩体制を確立。こののちわが国における大規模な戦乱は無くなる。
- ③1616・元和2年4月家康は75歳で没。
- ・ 徳川家による支配体制の整備はその後も続き、多くの外様大名のお家断絶、改易等を経て、体制が安定するのは関ヶ原の戦いから半世紀余りのち、3代將軍家光のころとされる。

以上

主な参考資料：

- 藤野保「幕藩体制史の研究」 吉川弘文館 1975年12月
 笠谷和比古「関ヶ原合戦と大坂の陣」 吉川弘文館 2007年11月
 白峰旬「関ヶ原合戦の真実」 宮帯出版社 2014年10月
 旧参謀本部編纂「関ヶ原の役」 徳間文庫 2016年5月
 光成準治「関ヶ原前夜-西軍大名たちの戦い」 角川ソフィア文庫 2018年3月
 渡邊大門ほか「歴史道 関ヶ原合戦 東西70将の決断」 朝日新聞出版 2021年7月
 小和田哲男ほか「歴史人 関ヶ原合戦大全」 ABCアーク 2022年12月
 黒田基樹「徳川家康の最新研究」 朝日新聞出版 2023年3月
 山内昌之「将軍の世紀」 文芸春秋社 2023年4月
 小和田泰恒ほか「歴史道 関ヶ原合戦と大坂の陣」 朝日新聞出版 2023年11月
 Wikipedia等関係WebSite

資料 1：関ヶ原の戦い： 布陣図



資料2：関ヶ原の戦い：戦後処理

#	東西	武将名	年齢	加増	加増高	新領	万石	合戦での動向	備考
東軍						15万石以上			
145	東軍	前田利長	39	加増	35.8	加賀金沢	119.3	北陸の戦い	越中・能登も領有。
174	東軍	結城秀康	27	加増	56.9	越前北ノ庄	67.0	上杉との戦い	家康二男。对上杉守備隊総大将。
80	東軍	伊達政宗	34	加増	2.0	陸奥仙台	60.5	上杉との戦い	「百万石の御墨付」は反故
51	東軍	蒲生秀行	18	加増	42.0	陸奥会津	60.0	上杉との戦い	景勝軍牽制
163	東軍	最上義光	55	加増	33.0	出羽山形	57.0	上杉との戦い	景勝軍を押さえる
54	東軍	黒田長政	33	加増	34.2	筑前名島	52.3	本戦	毛利家調略 父石垣原で勝利
153	東軍	松平忠吉	21	加増	42.0	尾張清洲	52.0	本戦	家康4男 東条松平家
16	東軍	池田輝政	36	加増	37.0	播磨姫路	52.0	本戦	岐阜城大垣城攻め 本戦
46	東軍	加藤清正	39	加増	26.5	肥後熊本	51.5	九州の戦い	行長宇土城 立花柳川城等攻撃調略
128	東軍	福島正則	40	加増	29.8	安芸広島	49.8	本戦	岐阜城大垣城攻め 本戦
137	東軍	細川忠興	38	加増	21.9	豊前小倉	39.9	本戦	父・幽斎丹後田辺城守備
7	東軍	浅野幸長	25	加増	15.1	紀伊和歌山	37.6	本戦	
81	東軍	田中吉政	53	加増	22.0	筑後柳河	32.0	本戦	岐阜城攻略 石田三成捕縛
222	東軍	堀秀治	25	安堵	0.0	越後春日山	30.0	上杉との戦い	越後国内一揆鎮圧
139	東軍	堀尾忠氏	23	加増	12.0	出雲松江	24.0	本戦	隠岐も領有
172	東軍	山内一豊	56	加増	15.4	土佐浦戸	22.2	本戦	
4	東軍	筒井定次	39	安堵	0.0	伊賀上野	20.0	本戦	
92	東軍	藤堂高虎	45	加増	12.0	伊予今治	20.0	本戦	
47	東軍	加藤嘉明	38	加増	10.0	伊予松山	20.0	本戦	岐阜城大垣城攻め 本戦三成と対峙
214	東軍	蜂須賀至鎮	15	安堵	0.0	阿波徳島	18.0	本戦	正妻家康養女
13	東軍	井伊直政	40	加増	6.0	近江彦根	18.0	本戦	東軍軍艦 家康本隊
108	東軍	中村忠一	11	加増	3.0	伯耆米子	17.5	本戦	
79	東軍	武田信吉	18	加増	11.0	常陸水戸	15.0	江戸城留守居	家康五男 一番乗り
西軍						主要武将			
312	西軍	大谷吉継	36	戦死		-	-	本戦	小早川秀秋軍と戦い、戦死。
329	西軍	長束正家	39	戦死		-	-	本戦	10月3日、開城後自刃。
310	西軍	石田三成	41	処刑		-	-	本戦	西軍主将。10月1日六条河原にて斬首。
304	西軍	安国寺恵瓊	不詳	処刑		-	-	本戦	10月1日、京都六条河原にて斬首。
323	西軍	小西行長	43	処刑		-	-	本戦	10月1日、京都六条河原にて斬首。
	西軍	宇喜多秀家	29	流罪		-	-	本戦	八丈島へ
	西軍	増田長盛	56	改易		-	-	大坂城留守居	改易出家
	西軍	織田秀信	21	改易		-	-	美濃岐阜城守備	改易出家 高野山へ
357	西軍	青木一矩	不詳	改易		-	-	北国口守備	病死で除封か
389	西軍	長宗我部盛親	26	改易		-	-	本戦	浪人へ
	西軍	立花宗茂	34	大名復帰		陸奥棚倉	1.0	近江大津城攻撃	のち旧領柳河10万石に加増転封
	西軍	丹羽長重	30	大名復帰		常陸古渡	1.0	前田利長と交戦	一旦改易 のち大名復帰
414	西軍	上杉景勝	45	減封		出羽米沢	30.0	出羽慶長合戦	120万石から30万石へ減封
419	西軍	毛利輝元	48	減封		長門萩	29.8	総大将	112万石から長門周防29.8万石に減封。
416	西軍	佐竹義宣	31	減封		出羽久保田	20.6	在国し親望	二代藩主・佐竹義隆の代に石高確定
420	西軍	毛利秀元	22	減封		長門府中	5.0	本戦	毛利本家より分知。
415	西軍	吉川広家	40	減封		周防岩国	3.0	本戦・内応	周防と長門を加増予定 毛利氏へ知行
256	西軍	小早川秀秋	19	加増	15.3	備前岡山	51.0	本戦	本戦寝返り
271	西軍	鍋島直茂	63	安堵	0	肥前佐賀	35.7	伊勢口守備	東軍内応 柳河城攻撃で所領安堵
442	西軍	蜂須賀家政	43	安堵	0	阿波徳島	17.3	北国口守備	自身出陣せず 嫡男・至鎮は東軍
424	西軍	生駒親正	75	安堵	0	讃岐高松	17.2	丹後田辺城攻撃	自身は出陣せず 嫡男一正東軍。
434	西軍	島津義弘	66	安堵	0	鹿児島薩摩	60.9	本戦	継嗣忠恒に安堵

注：「Wikipedia 関ヶ原の戦後処理」等より作成